

3 発達の段階に応じた教材開発

児童生徒の発達の段階を考慮して、適切な指導を行おう

～学校や学年の接続や系統性を踏まえることがポイントとなる～

学校における道德教育は、幼児期の指導から小学校、中学校へと、各学校段階における幼児児童生徒が見せる成長発達の様子やそれぞれの段階の実態等を考慮して、適切に指導を進めなければならない。

(1) 児童生徒の発達の段階に応じた道德性の育成

道德性は、生まれたときから身に付けているものではない。人間は、道德性の萌芽をもって生まれてくる。人間社会における様々な体験を通して学び、開花させ、固有のものを形成していくのである。道德性の発達には、様々な要素がかかわり合っているが、特に次の点に留意する必要がある。

- 第1は、よりよく生きようとする力を諸能力の発達に合わせて自らが引き出していくこと
- 第2は、体験等の広がりに合わせて豊かなかかわりを発展させていくこと
- 第3は、認識能力や心情等の発達に合わせて、道德的価値の自覚を深められるようにしていくこと

〈発達の視点からの資料の選定〉

道德性の発達は、基本的には他律から自律へ方向をとる。それは、判断能力から見れば、結果を重視する見方から動機をも重視する見方へ、主観的な見方から客観性を重視した見方へ、一面的な見方から多面的な見方へ、などの発達が指摘できる。

ともすれば、教材開発は、資料内容の難易等に重きをおき、発達の視点を考慮した資料を選定することが忘れられがちであった。しかし、発達の視点に目を向けることは、教え込み的色彩、教条主義的色彩の濃い指導から、児童生徒を中心とした道德の時間への足がかりとなるのではないかと考えられる。

例えば、イギリスの教育学者、ノーマン・ブルの発達段階（四段階説）に照らして考えると、

発達段階	有効に機能すると思われる資料
無道德 (アノミー)	○教え込み的役割の強い資料 (大人の権威への依存とともに、規範を確立させる。) (身近にみられる具体的事例を用いる。)
↓	↓
他 律	○今まで教えられたことが本当にそれでよかったのだろうか等を、仲間関係において迷い悩ませ、その上で自分で判断する資料 (他人の意図を考える。動機に注目させる。)
↓	↓
社会律	(社会的事例を用いることも考えられる。)
↓	↓
自 律	○他者の立場や考えを理解した上で自分なりの考え方を確立する資料 (合理性を追求させる。) (他との関係性において規範を相対化させる。)

といった資料の開発や活用を工夫することもできるのではないだろうか。

道徳の時間に用いる自作資料の長所は、児童生徒の実態に即した話題を提示できるところにある。そこで、児童生徒の発達の段階や特性などを考慮し、今、何に関心や興味があるのか、どんなことで悩み苦しんでいるのかなど、児童生徒のよりよく生きたいという願いに応えていきたい。

児童生徒の発達は、次のように学校や学年の段階によってほぼ共通した特徴を示すことや相応の発達の課題があるとともに、個人差も大きいことに留意し、一人一人の感じ方や考え方を大切にして指導に当たる必要がある。

【学校や学年の段階の特徴】

校種	段階	発 達 的 特 質
小 学 校	低 学 年	○道徳性の基本である自分でしなければならないことができるようになる。 ○幼児期の自己中心性はかなり残っているが、他人の立場を認めたり、理解したりする能力も徐々に発達してくる。 ○動植物などへも心で語りかけることができる。 ○善悪の判断や具体的な行為については、教師や保護者の影響を受ける部分が多いものの、行ってよいことと悪いことについての理解ができるようになる。 ○知的能力の発達や学校などにおける生活経験によって次第に自主性が増し、様々なかかわりを広げていく。
	中 学 年	○身体が丈夫になるにつれ、運動能力や知的な能力も大きく発達する。 ○社会的な活動能力が広がり、地域の施設や行事などに興味を示し、自然等への関心も増してくる。 ○問題解決能力の発達に伴い学習活動に一層興味を示すようになる。 ○計画的に努力する構えが身に付く。 ○自分の行為の善悪については、ある程度反省しながら把握できるようになる。 ○性差を意識する。
	高 学 年	○知的な能力においては、抽象的、論理的に思考する力が増す。 ○行為の結果とともに行為の動機をも十分に考慮できるようになる。(共感能力の発達) ○理想主義的な傾向が強く、自分の価値判断に固執しがちである。 ○自律的な態度が発達し、自分の行為を自分の判断で決定しようとする。 ○責任感が強くなり、批判力もついてくる。 ○異性に対しては、対立的ではなく、積極的な興味を抱くようになる。 ○属している集団や社会における自分の役割や責任などについての自覚が深まっていく。 ○環境保護などに目を向けるとともに、人間の力を超えたものへの畏敬の念も培われてくる。
中 学 校		心身両面の発達が著しく、他者との連帯を求めると同時に主体的な自我の確立を求め、自己の生き方についての関心が高まる時期である。 ○激しい心の揺れを経験しながら自己を確立していく。(自己の探求、理想の追求と自律の尊重) ○親や教師から仲間集団を意識するようになる。(人間関係の広がりや親密化) ○社会の一員としての自覚がめばえてくる。 ○具体的な事柄に関して首尾一貫した思考が可能になる。 ○目に見えない抽象的な事柄についてかなり深い思索ができる。(自然や人間の力を超えたものへの謙虚な態度の涵養)

〈参考〉子どもの発達段階ごとの重視すべき課題（「子どもの徳育の充実に向けた在り方について（報告）」から）

発達段階		重視すべき課題
乳幼児期		・愛着の形成 ・人に対する基本的信頼感の獲得 ・基本的な生活習慣の形成 ・十分な自己の発揮と他者の受容による自己肯定感の獲得 ・道徳性や社会性の芽生えとなる遊びなどを通じた子ども同士の体験活動の充実
学童期	小学校低学年	・「人として、行ってはならないこと」についての知識と感性の涵養や善悪の判断や規範意識の基礎の形成（集団や社会のルールを守る態度など） ・自然や美しいものに感動する心などの育成（情操の涵養）
	小学校高学年	・抽象的な思考の次元への適応や他者の視点に対する理解 ・自己肯定感の育成 ・自他の尊重の意識や他者への思いやりなどの涵養 ・集団における役割の自覚や主体的な責任意識の育成 ・体験活動の実施など実社会への興味・関心を持つきっかけづくり
青年前期	中学校	・人間としての生き方を踏まえ、自らの個性や適性を探求する経験を通して、自己を見つめ、自らの課題と正面から向き合い、自己の在り方を思考 ・社会の一員として他者と協力し、自立した生活を営む力の育成 ・法やきまりの意義の理解や公德心の自覚
青年中期	高等学校	・人間としての在り方生き方を踏まえ、自らの個性・適性を伸ばしつつ、生き方について考え、主体的な選択と進路の決定 ・他者の善意や支えへの感謝の気持ちとそれにこたえること ・社会の一員としての自覚を持った行動

Q： 学校段階において、どのようなことに留意して指導を行えばよいですか。



A： 道徳教育はすべての学校段階において一貫して取り組むべきものであり、幼稚園、小・中・高等学校の学校段階や小学校の低・中・高学年の各学年段階ごとにその重点を明確にし、より効果的な指導が行われるようにする必要がある。

その際、

- ・幼稚園においては規範意識の芽生えを培うこと



- ・小学校においては生きる上で基盤となる道徳的価値観の形成を図る指導を徹底するとともに自己の生き方についての指導を充実すること



- ・中学校においては思春期の特徴を考慮し、社会とのかかわりを踏まえ、人間としての生き方を見つめさせる指導を充実すること



- ・高等学校においては社会の一員としての自己の生き方を探求するなど人間としての在り方生き方についての自覚を一層深める指導を充実することにそれぞれ配慮する必要がある。



Q： 道徳の時間の指導は、どのようなことに留意して行えばよいですか。

A： **小学校**においては、

【低学年】 幼児教育との接続に配慮し、例えば、基本的な生活習慣や善悪の判断、きまりを守るなど、日常生活や学習の基盤となる道徳性の指導や感性に働きかける指導を重視する。

【中学年】 例えば、集団や社会のきまりを守り、身近な人々と協力し助け合うなど、体験や人間関係の広がりにも配慮した指導を重視する。

【高学年】 中学校段階との接続も視野に入れ、他者との人間関係や社会とのかかわりに一層目を向け、相手の立場の理解と支え合い、集団の一員としての役割と責任などに関する多様な経験を生かし、夢や希望をもって生きることの指導を重視する。特に高学年段階から同じテーマを複数の時間にわたって指導するなど、指導上の工夫を促進する。

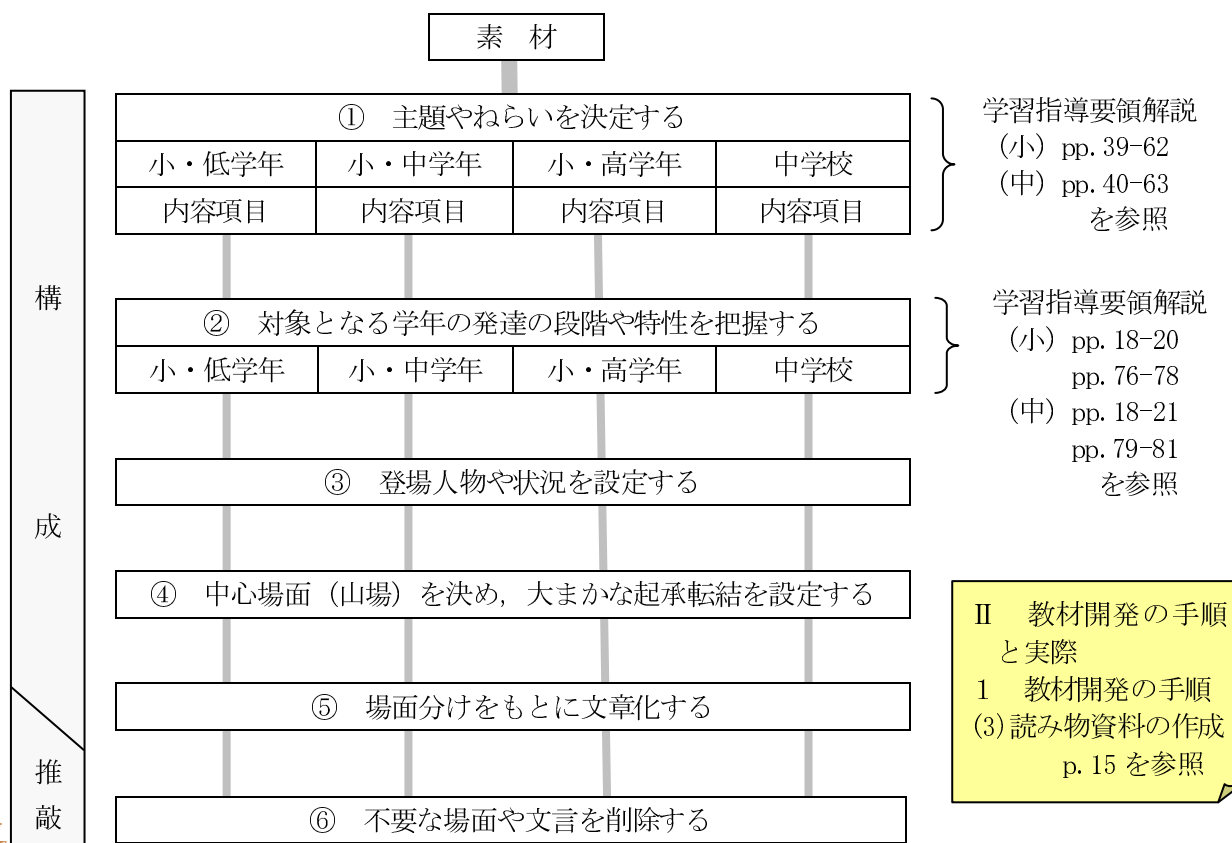
中学校においては、

道徳的価値に裏打ちされた人間としての生き方について自覚を深める指導を重視する。その際、法やきまり、社会とのかかわりなどに目を向ける、人物から生き方や人生訓を学んだり自分のテーマをもって考え討論したりするなど、多様な学習を促進する。

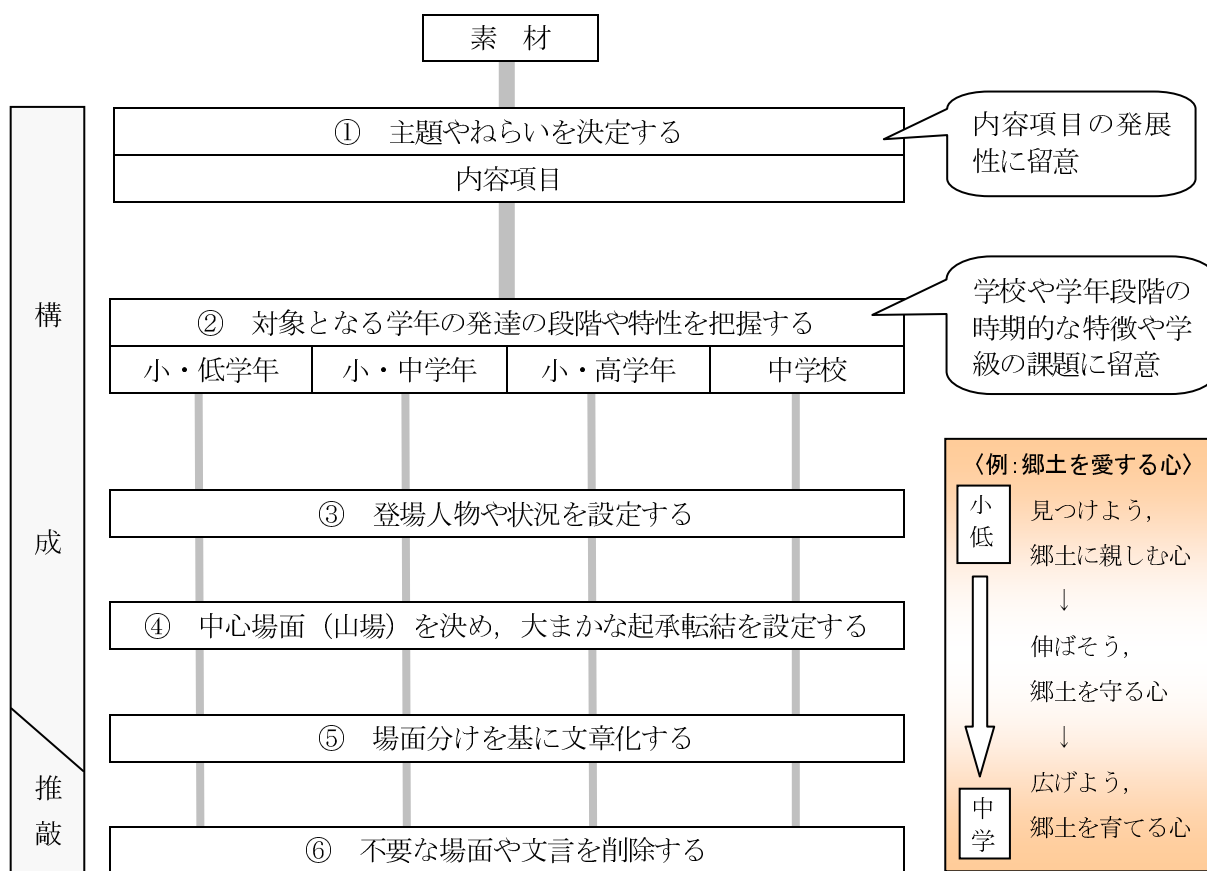
また、中学校は教科担任制であり、複数の教師が生徒の教科等の指導にかかわることを生かして、学年や学校において協力し合う指導体制による展開を重視する。

(2) 発達の段階に応じた教材開発の考え方

ア 基本型による場合



イ 同一素材，同一主題による場合



同一素材，同一主題の開発により期待される効果

- 教員の指導力の向上
 - ・ 内容項目の学年段階ごとの発展性を十分考慮した指導が一層行える。
 - ・ 指導上の課題を児童生徒の側から具体的にとらえた指導が一層行える。
- 市町及び校内の研修の充実
 - ・ 同一素材，同一主題とすることで，複数の教員による資料の多様な見方・考え方を交流することができ，開発のポイントが一層明確になる。 など

【発達の段階や学年・学級の課題を考慮した構成・推敲における留意点】

〈構成〉

- 場面はできる限り単純に展開するよう留意すること。下学年ほど登場人物が多すぎたり，複雑な展開になったりすると，容易に理解できない内容になる場合がある。
- 児童生徒の生活の場や地域（郷土）のとらえは年齢とともに広がっていくことに留意すること。児童生徒の考えることのできる範囲で指導できるよう配慮することが大切である。
- 挿絵や写真を効果的に配することも重要である。（下学年ほど視覚化に留意したい。）

〈推敲〉

- 叙述は児童生徒にとって理解しやすいものになるよう工夫する。（語彙，抽象度，漢字，文章の長さ等，1学年程度は難度を下げるように配慮することも考えられる。）
- 専門性のあるものなどについては，注釈や解説を付すこと。 など

(3) 発達の段階に応じた教材開発の実例 ～「ホタル」を素材として～

素材は、各市町の実態を考慮し、県内幅広く生息しかつなじみのある「ホタル」とした。

また、発達の段階の違いを明確にするため、上記(2)イの考え方を基に、開発を行った。

《教材開発の構想》

	小 学 校			中 学 校
	低 学 年	中 学 年	高 学 年	
資料名	素材：「ホタル」			
	ほたるのげんちゃん	ぼくはこん虫はかせ	きれいな川のままで	蛍の灯（ともしび）
内容項目	3－（２）自然愛護			
	身近な自然に親しみ、動植物に優しい心で接する。	自然のすばらしさや不思議さに感動し、自然や動植物を大切にする。	自然の偉大さを知り、自然環境を大切にする。	自然を愛護し、美しいものに感動する豊かな心を持ち、人間の力を越えたものに対する畏敬の念を深める。
段階の特徴	・自己中心性がある ・教師や保護者の判断に依存する。 ・善悪の判断ができるようになる。 ・動植物などへも心で語りかけられる。	・問題解決能力の発達に伴い、学習活動に一層興味を示す。 ・社会的な活動能力が広がり、自然等への関心が増す。 ・不思議さやすばらしさに感動する心が一層はぐくまれる。	・属している集団や社会における自分の役割や責任などについての自覚が深まっていく。 ・相手の身になって人の心を思いやる共感能力が発達する。 ・環境保護などに目を向けるとともに、人間の力を越えたものへの畏敬の念も培われてくる。	・自然や人間の力を越えたものに対して、美しさや神秘さを感じ、自然の中で癒される自己に気付くようになる。 ・眼前の事柄をただ表面的にとらえるだけでなく、その人間にとっての深い意味を感得することもできる。
判断基準	教師、保護者	友だち	社会	
教科等との関連	<u>生活科</u> ・身近な自然との触れ合い（飼育栽培）など	<u>社会科</u> ・地域の人々の健康な生活 <u>理科</u> ・昆虫と植物 ・身近な自然の観察など	<u>社会科</u> ・わが国の国土の自然 <u>理科</u> ・生物と環境 <u>総合的な学習の時間</u> ・課題「環境」など	<u>社会科</u> ・自然環境 <u>理科</u> ・自然と人間 <u>家庭科</u> ・身近な消費生活と環境 <u>総合的な学習の時間</u> ・課題「環境」など
作成の要点	・空想的な想像の世界に浸らせる。 ・大人の判断を示し、自己を見つめさせる。	・自然への親しみをもたらせる。 ・教科の学習との関連を意識させる。 ・友だちとのかかわりをつくる。	・共感能力を育てる。 ・人間と自然との共存の在り方を考えさせる。 ・自分のできる範囲で自然環境をよくしようとする態度を育ませる。	・美的な情操や感動する心を育てる。 ・自然を愛し、護ることといった環境保全の視点を入れる。
その他	・発達の段階に応じて、地域（郷土）のとらえの広がりを把握する。（例：学校区→市町→県） ・発達の段階に応じて、エピソードの取り上げ方（焦点化）、中心場面やねらいとする内容項目も変わることにも留意する。 例えば、今回は「自然愛護」を同一のねらいとして作成したが、他にも「郷土愛」「集団の一員としての自覚」「愛校心」や「勇気」（ホタルを主人公にした場合）なども考えられる。 ・発達の段階に応じて、行動のもとになる「心」、事実ではなく「人生の真実」を見ていく。 ・発達の段階に応じて、語彙、抽象度、文章量（情報量）等を配慮する。 ※ 各学年、学級の児童生徒の実態に即して考えることは言うまでもない。			

《開発教材例》

〔小学校低学年〕

「ほたるのげんちゃん」

「やっとそとに出られたぞ。」

すずしいなつによるでした。さなぎになり、二か月ほど土の中ですごしたほたるたちが、やっとせい虫になって、そとに出てきたのです。

「いままで、見たことのないせかいだ。」

じゆうにとびまわれるよろこびでいっぱい、ほたるのげんちゃん。うつくしいひかりをぴかぴかせせながら、げん気にとびまわっていました。

そこへ、ともだちのさとちゃんが、やってきていいました。

「あっちになかまがいるのよ。いってみましょう。」

むこうでは、たくさんのほたるのひかりが、ぴかぴかとかがやいています。

「よし、いってみよう。」

げんちゃんは、すぐにこたえました。

げんちゃんとさとちゃんが、なかまのところにいこうとしたときです。

「バシッ。」

小学生ぐらいの男の子が、二ひきをあみでつかまえました。男の子は、ほたるをつかまえにきていたのです。ほたるをつかまえた男の子は、大はしやぎでした。

男の子につかまったげんちゃんとさとちゃんは、せまい虫かごの中に入れられてしまいました。

「どうしよう、つかまってしまったわ。」

「せまくてくるしいな。」

げんちゃんは、あまりのおそろしさにぶるぶるふるえていました。

さとちゃんも、げんちゃんのとおりで、ふるえながらいいます。



そのとき、男の子のおかあさんでしょうか、やさしいこえがきこえてきました。

「かわいそうでしょ。にがしてあげなさい。ほたるのおかあさんも、きっとしんぱいしているわ。」

「でも、・・・・・・・・・・」

すこしたって虫かごのまどがあきました。げんちゃんとさとちゃんは、いそいで外に出ました。そしてなかまのところにとんでいきました。

「よかったね。」

「よかったね。」

ほたるのひかりが、つよくよわく、まるでおしゃべりをしているかのように、ぴかぴかがやいていました。



「ぼくはこん虫はかせ」

ひろしは、理科の時間が大好きです。
こん虫の学習が始まった最初の時間、クラスの友だちは、ひろしがこん虫のことをよく知っているの、びっくりしました。

それから、みんながひろしのことを、「こん虫はかせ」と呼ぶようになりました。
ひろしは、みんなにほめられているようで、うれしくなりました。

ある日の理科の時間のことです。

ホタルのことが話題になりました。

ひろしは、ホタルをまだ一度も見たことがありません。

「ホタルは、光るんだよ。」

と、友だちのあきらが教えてくれました。

「こん虫が光るのか、ふしぎだなあ。見てみたいなあ。」

ひろしは、ホタルを見たくてたまらなくなりました。

「じゃあ、ぼくの家においでよ。近くの川でホタルが見られるよ。」

今ばんいっしょに見に行こう。」

あきらがさそってくれました。

ひろしは、わくわくしながら夜になるのを待ちました。

夜になりました。あきらのお父さんが二人をホタルを見につれていってくれました。

遠くから川の水の流れる音が聞こえてきます。

ひろしとあきは、川の音のする方へ歩いていきました。

川の方では、たくさんのホタルがゆっくりと光ったり消えたりしていました。

「うわあ・・・・。」

ひろしは、ホタルに見とれてしまいました。

「ほら、あっちにも、もっとたくさんホタルがいるよ。」

あきらが指さす方を見ると、川いっぱいホタルが光っています。

「いいなあ、かっこいいなあ。部屋の中でも光って、きれいだろうなあ。」

そう思うと、ホタルがほしくてたまらなくなりました。ひろしは、ホタルを一びきつかまえると、手のひらにつつまこみました。

「ひろし君、ホタルを初めて見た感想はどうだい。」

あきらのお父さんが話しかけてきました。



「あんまりきれいなんでびっくりしました。」

「こん虫はかせのひろし君でもびっくりするくらいすごいかい？」

「ぼく、ホタルを見たのは初めてなんです。ぼくの家近くにもいればいいのになあ。」

「ホタルはね、どこにでも住めるわけじゃないんだよ。きれいな水のところにしか住めないんだ。よう虫は、九か月以上も水の中ですごす。さなぎになると今度は土の中で二か月もすごすんだ。やっと成虫になってもね、つゆを少しずつ飲みながら、たった十日間しか生きていけないんだよ。そうしてみると、ホタルの光もちがって見えるだろう。」

あきらのお父さんの話を聞いたひろしは、はっとして、自分の手を見つめました。



「よし、今度こそ、本当のこん虫はかせになるぞ。」

ひろしは、手のひらをそっとひらき、ホタルをはなしてやりました。それから、ひろしは、ゆっくりと光りながら川の方へとんでいくホタルを、じっと見守りました。



Q：ホタルについて教えてください。

A：広く世界に分布しており、およそ 2000 種が知られている。特にアジア、アメリカの熱帯地域に種類が多く、日本にはこのうち 40 種余りが産する。代表的な日本のホタルはゲンジボタルとヘイケボタルであるが、体長がそれぞれおよそ 15 ミリメートルと 8 ミリメートルと違う。そのほか前胸背面中央の黒い縦条がヘイケボタルでは太いが、ゲンジボタルでは細くて中央で横に突き出ている。分布もゲンジボタルが本州から九州と対馬、ヘイケボタルが北海道から九州と東シベリアなどと異なる。ホタルといえば一般には発光するものと思われているが、ほとんど光らない種が多く、日本産でよく光るのは 10 種ほどである。光の色は普通黄色ないし黄緑色、ときに橙色である。



「きれいな川のままで」



ぼくの学校のそばには、川が流れています。その川には、フナやトンボ、川えびなどの生き物がたくさんいます。夏にはホタルがおしりの先を光らせて、川のまわりをとび回ります。

夏休みが近づいたころ、田中さんというおじいさんが学校にやって来ました。川でホタルの卵をみつけたので、子どもたちに見せてほしいということでした。ぼくは、川へよく遊びに行きますが、ホタルの卵を見たことがありません。田中さんが、水そうを持って教室に入ってきた時、わくわくしてきました。

「この水ごけに、卵がついとるよ。」

と田中さんが教えてくれました。でも、卵がどこにあるのかなかなか見つけることができません。田中さんが卵を指さしてくれたので、やっと見つけることができました。とても小さな卵がいくつついています。すると、田中さんが、

「一ヶ月ぐらいしたら卵がかえる。そうしたら川へ放そうと思っているんじやよ。」

とうれしそうに教えてくれました。

夏休みも終わりが近づいたある日、ぼくは、川へ魚をとりに行きました。でも、なかなかあみにかかりません。だんだんあせをかいてきて、のどがかわいたので、川ぎしの岩にすわってジュースを飲んでいたら、ぼくのそばに魚のむれが近づいて来ました。さっとあみを取ってつかまえようとしたのですが、にげられてしまいました。ぼくは、くやしくて魚のむれにむかってジュースの缶を投げてしまいました。

夕方になりましたが、なんとか魚をつかまえたくて、あみを持って川をのぞいていると、

「ぼく、何をつかまえているんだい。」

と後ろから声がしました。ふりむくと、夏休み前にホタルの卵を見せてくれた田中さんが立っていました。手には、ゴミが入ったビニール袋を持っています。

「この川には、生き物がたくさんおるじやろう。前、みんなに見せたホタルの卵もこの川で見つけたんじや。」

「へえ。そうだったの。」

「でも、ちょっとするとゴミがふえてしまうんじや。それに、心無い人のごみの投げ捨てのせいで、この川からホタルがいなくなってしまったこともあったんじや。」

「えっ・・・。」

田中さんは再びゴミを見つけては、腰をかがめてひろいはじめました。確かによくみると、ジュースの缶など川辺のあちこちらにごみが落ちています。ぼくは、さっき自分が投げ捨て



たジュースの缶のあたりをとっさに見回しました。そして、ぼくと田中さんのあいだにある岩かげに、ジュースの缶があるのを見つけました。

田中さんはまだ気づいていません。ぼくは、田中さんが腰をかがめて他のゴミをひろっているあいだに、ジュースの缶をすばやくひろい上げ、ズボンのうしろポケットに入れました。

ゴミをひろって腰をあげた田中さんが、ぼくの方をむいて言いました。

「そうそう、この前みんなに見せたホタルの卵がかえりはじめたんじゃよ。来週あたり川へ放したいんじゃ。ホタルにとって、この川が一番住みやすいからのう。君も手伝ってくれないかい。」

「はい。」

ぼくは、大きくうなずきました。



Q：ホタルの成育期間について教えてください。

A：水生のゲンジボタルでは卵から成虫まで普通1年、ときに2年以上を要する。

一例では、成虫（6月中旬）



産卵（6月下旬）：草の根際（ねぎわ）やコケ、または湿った土上や土中などに産卵。卵は一般に黄白色で球形。



孵化（7月上旬）



老熟幼虫（翌年5月上旬）



蛹（5月中旬）



成虫 となっている。

成虫期間は10～15日前後である。



ともしび
「蛍の 灯」

ほ ほ ほたるこい あっちのみずは にがいぞ
こっちのみずは あまいぞ ほ ほ ほたるこい

思い出せば、物心ついた頃からそうだった。
初夏になると一年に一度、谷あいの棚田で野良仕事をして帰ってきた父が
「今日は珍しいものを持って返ったよ。」「電気を消してごらん。」
と大事そうに手渡してくれたもの。
それが、ホタルぶくろの花に入った蛍だった。

電気を消して、しばらくするとほのかにホタルぶくろの花が灯った。
「うわあ〜。」
ほおづえ
頬杖をついて見ている顔が自然にほころんだ。



三人兄妹の私が一番にそれをもつことはなかったが、二人が見飽きた頃、やっと手にすることができた。ずっとそれを持って見ていたかったが、私が持つ頃になるときまって
「自然に還してあげなさい。」
と父は言った。父によると蛍は一、二週間ぐらいしか生きられず、幼虫の頃は餌であるカワニナがいないと大きくなれない。カワニナは川遊びでよく集めていたから、そんなに珍しいものではなかったが父の話は妙に説得力があった。
仕方なく、私は母と蛍の入ったホタルぶくろを持って裏庭に出ていった。夜空に蛍を放つ、一瞬の寂しさと満足感を幼心に味わっていた。

それから十数年経ち、自然豊かな県北に就職した。広島県内で一番南の島で生活していた私が、島根県境の町で生活することになった。新しい環境・人間関係になかなか慣れず、四苦八苦していた。そんな六月のある日、考え事をしながら車を走らせていると暗闇に一つの
あかり
灯。

「おや？」
その灯のあたりをじっと目を凝らして見ていると、「ああ！」と思わず声があかりが漏れた。

「お帰り。夏が来るよ。」
とでも言わんばかりに、すいーっと夜空にあかりが灯が灯っては消え灯っては消えた。その灯を追っていくと、また別の灯が灯っている。幼い頃に手元を離れ、夜空に舞ったあの灯だ。



これまでの年月が走馬灯のように駆け巡った。なんだかわからないけれど明日も頑張ろうという気持ちにさせてもらった。

気が付けば県北での生活が島での生活よりも長くなっていた。

そんなある日、夫がまだ幼い息子に嬉しそうに「蛍を知っているか？夜になったらいっぱい
の蛍を見に行こうね。」と誘っている。

夕食を済ませ、街灯一つない真っ暗な外へ出る。ゲーコ、ゲーコ蛙の大合唱。息子と私を車
に乗せ、車を走らせる。

「うわあ〜。スゴイ!」「見て。見て。」

という声に振り向くと、真っ暗やみの田んぼ脇の水路に、これまで見たことのない無数の蛍。

学生時代、広島市内で生活していたので美しいイルミネーションは見慣れていた私だったが、思わず息を飲むほどの美しさ。無意識のうちに「うわあ〜。キレイ〜!」と声が出ていた。

「乱舞」とは、このことか。生まれて初めて実感した。圧倒される蛍の舞い。

愛おしい息子が大きくなった時、この光景を覚えているだろうか？

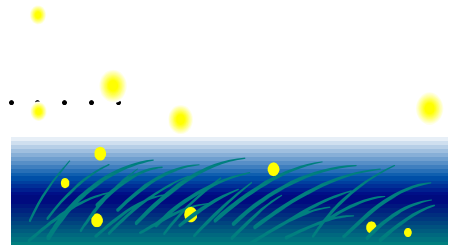
たとえ覚えていなくても、毎年この時期に見られるのだろうか？

そして、まだこの美しさを見たことがない島に住む幼な馴染みにも見せてやりたい。

ほ ほ ほたるこい あっちのみずは にがいぞ

こっちのみずは あまいぞ ほ ほ ほたるこい

ともしび
蛍の 灯 いつまでも



Q：ホタルぶくろってどんな花ですか。

A：ホタルぶくろ（蛍袋）とは、キキョウ科の
多年草で初夏に大きな釣鐘上の花を咲か
せる。花は淡紅紫色
または白色をしてい
る。

